繪本通俗三國志

四編

六

東京圖書館

和書門
小說類
二六函
七架
七八號
七五冊

繪本通俗三國志四編卷之六

目録

明治十年交換

曹操大宴銅雀臺

孔明三気死周瑜

孔明大哭周瑜

TOKYO LIBRARY

繪本通俗三国志四編巻之六

曹操大宴銅雀臺

赤壁の合戰に曹操が百万の勢残り少く討ま一ぱいの恨をきぶんとなり人ども軍に命を逃さしく都に回り常にみの恨をきぶんとなり人ども軍勢かいまど整へど。又い玄德孫權が力をあはせて。拒んとて伯を時を待て居たりしるが。建安十五年の春銅雀臺の造營事をおこなはれ文武の大將を。鄴城にあつめ酒宴を設て慶てをおこなはれ文武の大將を。鄴城にあつめ酒宴を設て慶の雀を地中より掘出し。漳河の辺に高き臺を立さしめて銅雀臺と号し。左に玉龍臺を建て。右に金鳳臺を立ゆ高さ十余丈にして空中に反橋をうけて往来を通ふ

門戸人金碧目を輝まし直欄横檻珠玉日を映ぜり。
操七宝の金冠をいぐぎ緑錦の袍を着て腰に玉帯をうけ
足に珠履を踏で。高臺に上りぬ。文武の大将。とぐく臺
下に侍立す。曹操よりの紫将の弓を式人として赤地の錦の
袍を。高き拝の杖にうけ。百歩を隔て。二行の諸将と
備へ曹氏の一族へ。紅の袍を着て外様の諸将へ。緑
の袍を着て尽く馬に乗て。雕弓に長き矢をとりそえ。一斉
にそなへぬ。曹操下知して傳さく曰く。もし揚にうけたる袍
の赤き心當て射たるものあらば。金を鳴し鼓を打て。声
をあらはせ。その袍を因心賞とすべし。射損じたる
ものは。水をのませて罰とすべし。よく射るものは。射
よ射よとあざるものは。罰盃を飲。その言いまだ果ざるに。紅の
袍を被たる内より。一人弓を持て馬を出す。諸人是をみて
きべ。とあらち曹操が姪に曹休字は文烈あり。性来馬をと
をせて。走ること三遭。よく引て下ど射。その矢直中に
あたりぬきべ堂上堂下。あの射りくと感じく金鼓をあ
らまし曹操も大に喜んでいまだ家の千里の駒ありとい
ひぬきべ近侍の人。揚にうけたる錦をとりて曹休にあたへ
んとすれば忽ち緑の袍を着たる中より一将馬をとばせ出
されば丞相の錦あり。一族の内より取べしとあるに某あり
たりの人とよびとりて馬を乗しくとせよ。諸人是をみて
きあらち荆州の大将。文聘字は仲業あり。一矢に人と射

まべ文聘馬とうけさん兵と射る。その矢直中ゑ中ハまべ金鼓
とあらゝく感称ゑ文聘大音あげさらるよく揚ゑうけたる
錦とゑまゑ渡ゝゑ人とおぐりハまべ又紅の袍を着たる内
より一人馬を乗ゝくりけ出小将軍ゑぐゑ射中ゑ入り汝
奪いんとのいあゑゑぞゑ手并のゐどをえよやといんで引
詰さハこと射る。諸人声をそろへて感嘆ゝたまぞとえまゑ
べ曹操が従弟の曹洪あり。走りよりて揚ゑうけたる錦を
とらんとされべ又緑の袍を着たる中より一人の大将馬を
出ゝ汝三人心當ゑ射中たりとゝへどもあんぞさのゝ奇妙
とゑゑゑ足んやゑぐ手柄のゐどをえよやと叫ぶ諸人ゑまゑとえ
まべ河間の張郃あり。馬をとばして往来ゝ後さゑゑあり

射りまべその矢あやまゑまど心當ゑあたりて四度をかゑる一
切ゝ迯まぎりゝべ張郃大音あげたるまゑゑまゑとおぐ
らのあらん錦を渡せとおぐるゑゑ又紅の袍を着たる中ゑ
り一人馬をゑ出ゝ御辺後さゑ四筋の矢を射中たりとて
いぐるまゑとおぐきとおぐる諸人ゑまゑとえまべ夏侯淵を
馬を飛ゝく往来ゝ敵近くありりるとき首を回ゝく後さ
ゑゑ射その矢あやまりどさきゑ張郃が射たる四條の矢の
直中ゑ立ルまべ馬をおぐらせ大音あげいるゑ錦の主ハゑまゑ
あらぎやとのゐりゑとき諸人感称ゝく金鼓をあらゝりまべ
又緑の袍を着たる中より一将とゑゑて馬を出ゝ御切錦
を取をとあるまゑ留てゑまゑ返せとおぐる諸人ゑまゑとえまべ

大将徐晃あり。鳴をあげて居まべ徐晃大音声をあげ。汝ホ心當る射中なまべと安んぞ錦を取んぞ錦をさるとうんとやといふて。引詰て丁と放れその矢遥に揚の枝を射切て錦の袍地に落りまべ走りよりて背を打うけ馬を

とべりてせ回り基上ものぞんで。丞相の賜を謝しまつる。

ると。よべくりはまべ諸人大に驚くるに忽ち基の下より一人。馬とおどらせ声をあげ。汝錦を取て何へ行やくるまてよ

あさへよと呼ぶ諸人おまとをまべ譙郡の許褚あり真馬とうけよせて奪へまべ徐晃奪へまべと逃まべり相

近まありはまべ弓をかけてさんぐに許褚を打許褚左の手にその弓を握り。右の手に徐晃を掴でまべ引落さんと

まべはまべ徐晃弓をまてて馬より飛下て逃んとまるに許褚も

続て馬より下二人引組んで錦を引合さんぐに打擲を曹

操基の上よりまるまてのぞまべ人を出しく両方へ引のけしむると

。その錦はまべに微塵になりけり曹操二人を基上におべのぞせ

りるに徐晃が目をいらしー拳を握り許褚が牙を咬眉を逆とと

もにあらそへんとする。気色にまべけまべ曹操大に笑ひまべ今

日。汝ホ技芸をあらそへんとまるまべ。錦の袍を惜まんや

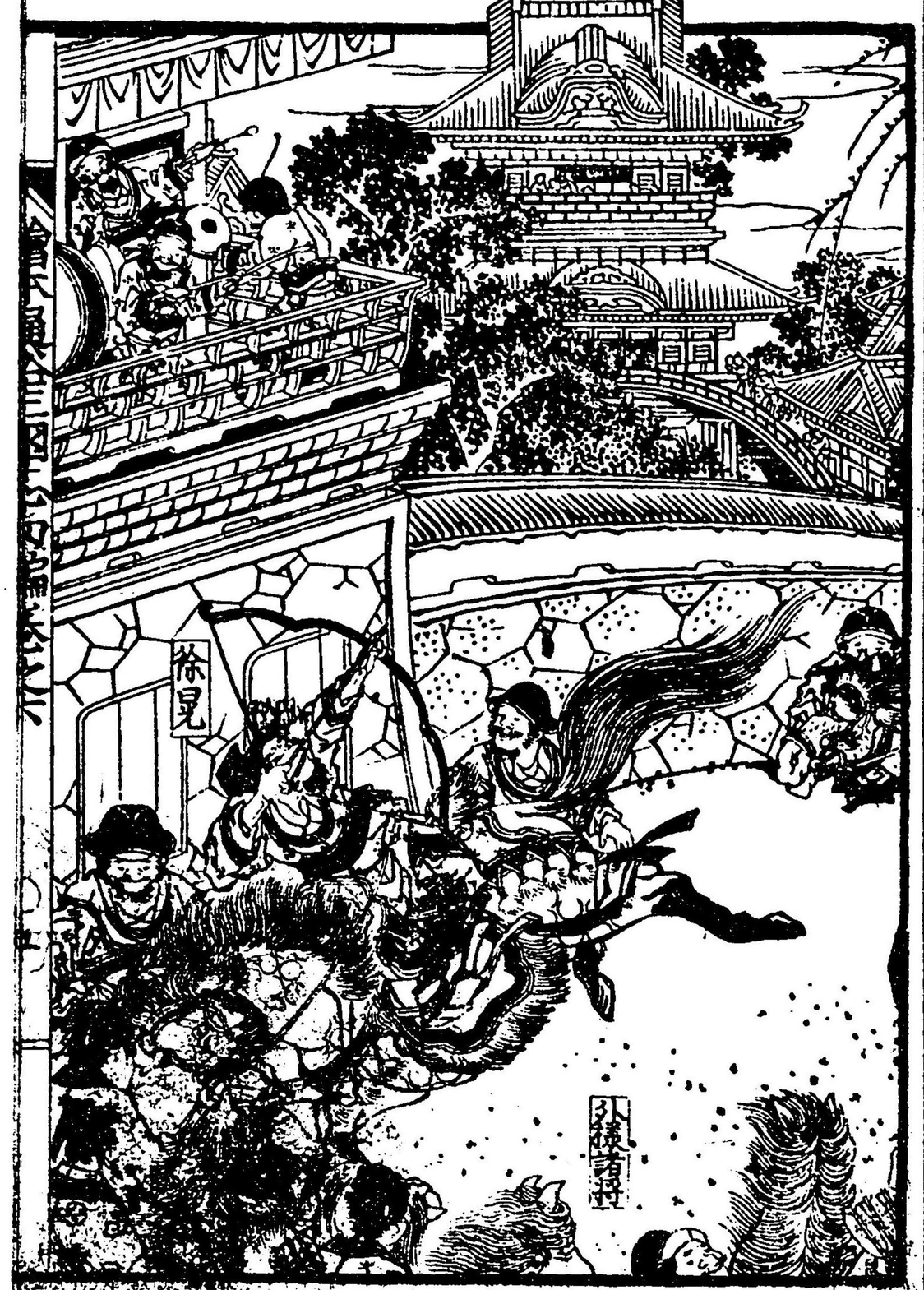
とらんとて。大武の大将を。尽く基上に招ぎ蜀江の錦一匹づく

まけあたへ。位階によりて。列坐ー水陸の珍味をたしなみ音楽

天にひびき。酒宴數刻にまべ曹操ハ武将へ已に

弓馬をあらそひて能をあらせ文官のものどもへ博学の名

許褚
曹氏族


徐晃
孫策諸將

士あるべしの臺上のぶりにて。おんぞ雀章を賦しく。一時の勝事と祀せざるとのぶりまべやうくの文官。坐と起てさまと謝。

銅雀臺高壮三帝幾
三千剣佩趨黄道
風動鋪簧金鳳舞
君臣慶會休辞醉

稱がくくを鈞命をまたがくんとのくんとなるひる相議りるとを。一人さを。

さくさ士て曰く某不才なのくども。

曹操さまてうえまべさてあいち諫議大夫参司空軍事東海郯の人なる王朗字は景興あり雲箋と拂て七言を綴る。

水明山秀競光輝
百萬貔貅現紫微
雲生碧在平龍飛
携得天香満袖帰

曹操大いに喜び王爵をりて酒をなべたれいちその王爵を恩賞をあるべ又詩を将ゆりるべ

賞をあたくりまべ王朗拝謝しく退くるる又一人さくさ生て曰く老臣も得ぐくくの俚語を獻らん曹操さまとりまべ東武亭侯侍中尚書左僕射顔子長社の人なる鍾繇字は元常とよく隷書の妙を得たるものあり。さまあいち七言八句を書しを曰く。

銅雀臺高接上天
欄干屈曲留明月
漢祖歌風空擊筑
主人成德齊堯舜
凝眸覽遍雁山川
窓戸玲瓏壓紫烟
定王戲馬漫加鞭
願樂昇平万万年

曹操さまとりまべてうぐりあく喜び御辺の雀作。りまべを過譽とるとをあべぐーとりあくて。思賞をあるべ又詩を将ゆりるべ

もとより愚庸にして才淺けれども始め孝廉に挙られ微名を蒙り立るときに望足りとなれども後に天下の大乱にあひて病を養人為に故里に回り譙東の五十里に精舎を築き自ら教書を読春秋を猟とす。二十年の計とあり身の難を避れ天下の治るを待て又仕官せんとなれども卒に甚だ意に任せざる朝廷召て点軍校尉とす。しかるに袁紹の逆賊と誅し功名を世に傳く死して後に墓を封じて漢の故征西将軍曹侯の墓とよべ先祖を辱しめず平生の願もまた是なり。であらんとなれども又董卓が難にあひて義兵をあげ黄巾の乱を平げて二万余級の首を取後に袁術を討てその四人の大将成擒し袁紹を破てその二人の子を誅し劉表を定て荆州を

位をでて宰相に登りこれ人臣の富貴身に極り。意の望をでる過たり。天下もしまさに亡んとす。国々に謀反して帝王と称ずるものに数るに人あらんやあらんや権重く。位高きとうえて天下を簒のんありといふ。まさに大乱の道あり。齊の桓公晋の文公よく後代に名を傳るそのその身弊ひ大にしてまで周室に事るの人あり孔子の曰く周文王三分天下有其二以服事殷周之德其可謂至德也而矣そまよく大なるかな。小なるに事るまことに耿々在心とい又楽毅が傳て燕に昔日楽毅。趙に敗る趙王兵を起して燕を伐んとす楽毅地に拜伏し涙をながして曰く。臣背月燕王に事るまで大王事るがごとしむしろ死とも。不義のことを為じとい又蒙恬

傳て読み胡夷昔日蒙恬が殺さんとせ。蒙恬が曰くわれ父祖
てよび子孫に至るまで德を秦に積むこと三世あり。いま手下に
精兵三十万をあつめたり。いまこれを用て謀反せば胡夷まで
うんとうちたおすべし。されども。あらぬ死して義を全くするこのね
あんて父祖の教を辱しめざるまた先君の恩を忘れざるありとい
りいまこの二人の書を読で感嘆しく涙をながさざるとい
ふ〜いまこの安ぞ篡逆のんあらんや。今日の言へこころあるこの肝膽を
吐の誠あり。右丞相ごろに諸る仔細ぞむ〜周公金縢の書を
遺しく〜ぞ明らかに人の信ぜざらんことを怕るべきあ
ぞむる石の兵をもてくるぶ封ぜらるまたる武平侯の國に回らん
と欲ぐ人どももし手下の兵をもてよび人に害せらるまんことを怕る有

又子孫の為を計り。万一人に害せらるまば漢の天下に隨ぐ
滅びるんこのもへに已ことを得ざるし。兵を司る汝ホ文武の諸
将ぞあらぬるぶこの心をもるまどとをいりまば諸将ここに拜伏し。
伊尹周公とらんも丞相の德にまさるべ曹操又
教盃をうたぶけ。そぞ人ぞ大に酔ひまば左右に命ずく。華硯を
とりよせまもぞ。銅雀臺の賦を作らんとて雲笑をお
しのべ吾獨に歩に高臺今俯觀万里之山河ぞらんに句を
書りるに忽ち人あり。吳の孫權の華歆といふものを使とし。天
子に表を上て玄德を荆州の太守に。妹孫夫人をもつて妻せ。
荆州九郡大半をもて玄德に属せりと告ぬ[illegible]曹操手足を
もつてたんに駭きぞ人ぞ華を落しりぬ。丞相敵

軍の中にありて矢に中り石に打たれてくたくたと動し
のちいよいよ玄德が荆州にて得たるときいておのれ人をうらぎるまでに
驚きのあへぬ。曹操が曰く玄德ひとり人中の龍あり。平生なまじ水と
得ばいよ荆州にて得て龍の大海に入るごとし。まことにあんぬ驚
ざるべし。程昱が曰くいよ華歆が来りたる本意を糺すに曹操
が曰くおらばい程昱が曰く吳の孫權むさより玄德を憎むもの兵
を起してきたりて攻べ丞相の虛に乘じて討ばんとて怕る孫權
いよ華歆を使として玄德を太守に封ぜんと奏するものへ一計
にへ玄德がんを安んじ二にへ丞相の望を塞ぐ為なり曹操が
曰くおうとときいるある計を用べき。程昱が曰く某一計の計あり。
玄德と孫權とを合戦させて味方中より攻るとへ二人を

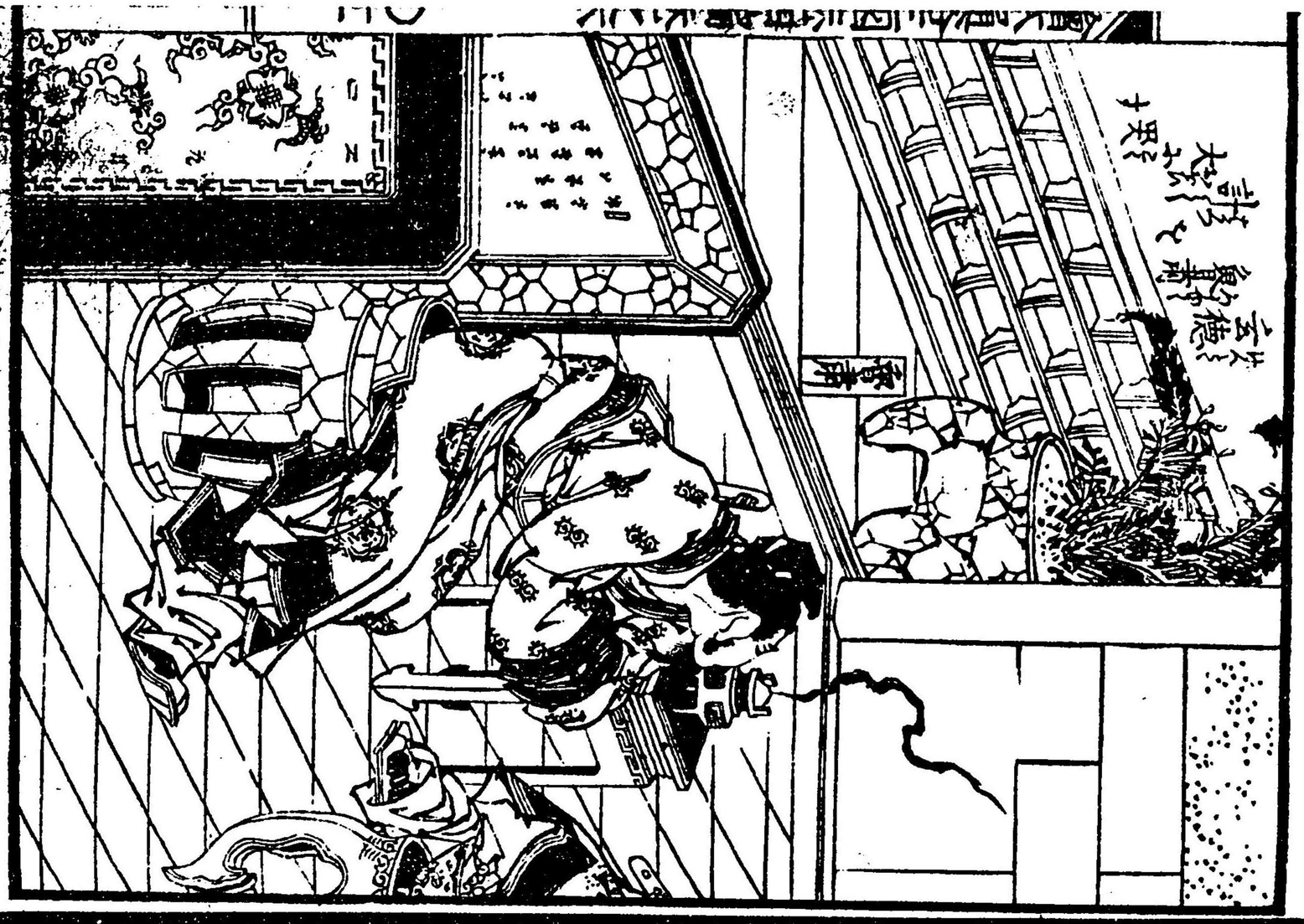
滅ぼさんと一舉にあり曹操大に喜で曰くまことに南方を討と
ても玄德孫權が力をあはせて拒んとを怕る汝いかあるる
計ありある程昱が曰く吳の孫權が頼むものは周瑜あり丞相
いよ天子の勅命ありとて周瑜を南郡の太守に封じ程普
を江夏の太守に封じ華歆を朝廷にとどめて用ひのへ
あべ周瑜程普ばかり封ぜられたる城を取んとて玄德と荆州を
あらそひあらば合戦にとへんそのとへ虛に乘じて別に良計を
あさべ忽ちに打滅さんと曹操これを聞て喜びこの計をもつて合
へりとて即時に華歆を臺上によびのぼせ。ねんごろに恩賞をあたへ
て。大理寺少卿に封じ詔を下して。周瑜を。總領南郡の太
守に封じ程普を江夏の太守に封じ。勅命を傳て。吳の国へ

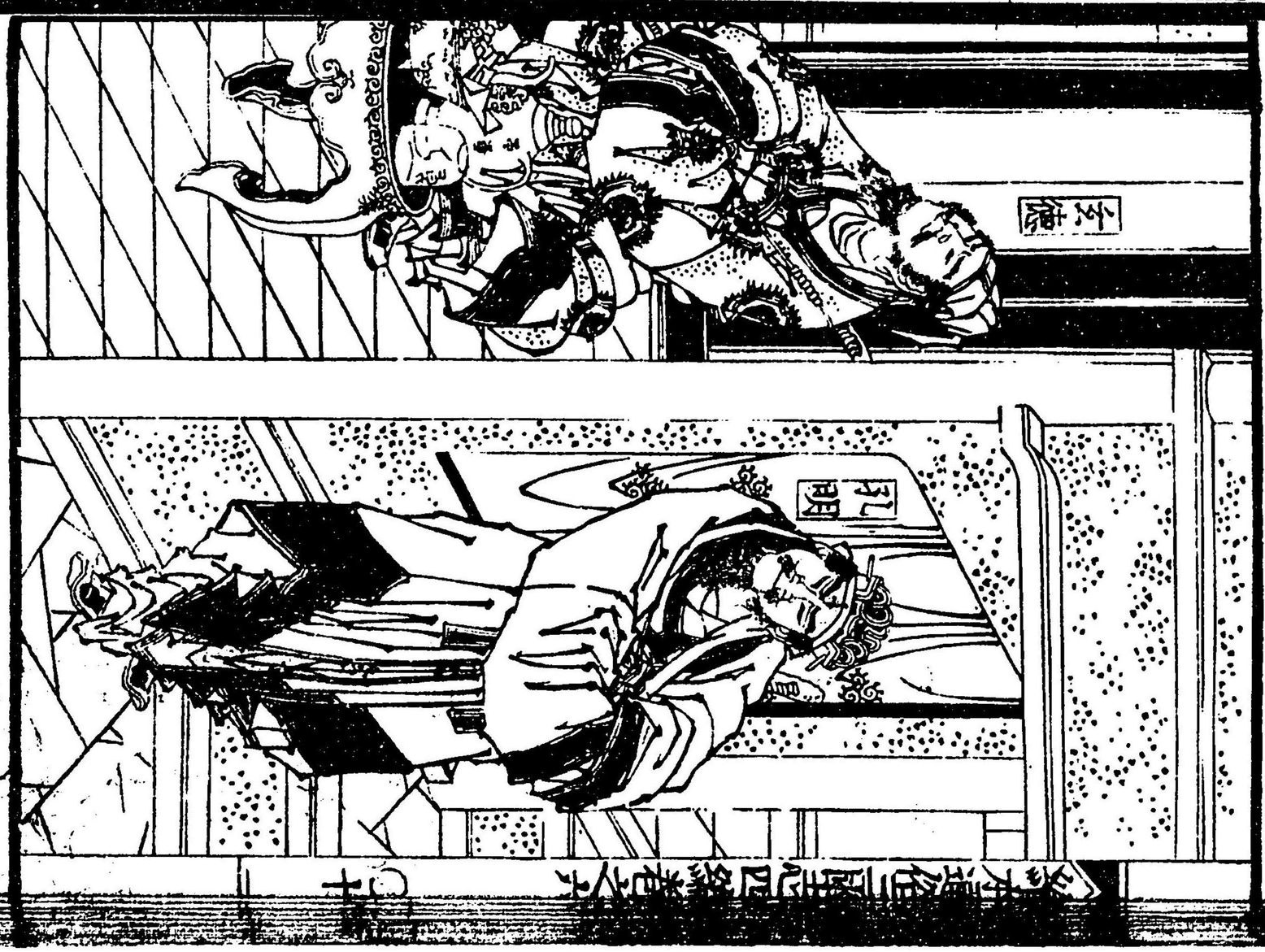
使として酒宴数刻ありて諸大将と引具して許昌へぞ回りける

孔明三氣死周瑜

去程に勅使詔を傳へて呉へ下り周瑜と南郡の太守の封を程普と江夏の太守の封をのこりなくこれを受恩と謝して勅使と回りけるが周瑜ひそかに荆州へ元るべき国とるべきと玄徳に取まいらせ天子詔を下してこれを南郡の太守の封をのこりなくこれを早く荆州に取回して日比の恨を散ぜんとそ身を蒼と狼と紫と三あるべきの書簡をもつて呉主孫權へ南徐へ遣はしてその書簡をひらきみいそぎ魯肅を呼んで曰く汝さた

荆州に取返さんとて玄徳孔明に仕掛まいたりいま玄徳が妹の婿とあるていにて荆州に返さてとおしゃるとて来まり蜀の国を取てのちに荆州に返さんとて孫權大に叱りて曰くいまの蜀を取て後に返さんといつ何まこの年に返さるべきいつの月日を送らんすぐ一生の中に荆州を取てもあらんと魯肅が曰く某孫權を再び荆州に渡さんとて取返さんとて卒に船に乗りて出でんとせし玄徳荆州に人を求めんとて四方遠近にてきこえ傳へ聞くに呉の国より魯肅きたりと告げまいらせ玄徳





きあいち孔明に問て曰くいまうまこゞ来るへあるべき人ぞ孔明ぞ曰く
孫權さたゞ君て荆州の太守ゆきくむまこゞ曹操が隙を伺へ
んをて怕まてあり曹操ゆゑ周瑜て南郡の太守ときてされ又
荆州ゆゑてあらそいせく中きく計てあさん為あり曽粛ぞきなを
ろへ周瑜をでゆ南郡の太守ゆ封ぜらまて又荆州ゆゑて奪い
取んとさるの意て起せり玄德の曰く去るときへ「いうぞお
さゆべき孔明ぞ曰く曽粛もし荆州のうゆてやゆ生さべ君兒
角の谷てあさぞ大ゆ声とたあいて哭きゆ君の哀んで深く
哭きゆへとき某ぞ問ゆ生く計てあさん玄德とおいち生む
うへ曽粛て堂上ゆ請ぞく坐て饗りゆまこべ曽粛ぞいく。
皇叔ゆうぞ君の婿あきべ某ぞ為ゆも主君あり安んぞ坐へ

就べき玄德の曰くあゆ人ゆ後退へゆ旧交てあゆ人ゆ曽
粛卒ゆろたゆゆ坐へ茶礼てゆいて中へゆ某いよ呉侯の命
て受ゆだら荆州の事てゆきんゆゆ来へゆきてゆ久く
借のひていよゆ至るまて返さゆ今日一家の好てむすべ
るあれべ早くゆゆへゆ返へゆ玄德きてもあへゆ面て掩て
大ゆ哭きゆゆて曽粛悔ひて問て曰く皇叔あゆどてう哭
のゆ玄德声てゆいて哀へゆ孔明屏風の後
より生て曰くゆゆより聞へゆ曽粛ぞ君の哭きゆ仔
細てきりのゆへゆ曽粛ぞ曰く某いゆぞきらぞ孔明ぞ曰く
ぞいゆその仔細て述んぞ君きゆ荆州て借のゆへとき蜀の国
て取て後ゆ返さんとせゆ生へゆ蜀の劉璋へ漢

朝の骨肉なれバ君と兄弟のごとし。かし兵を起して其の国を奪
取バ天下の人唾を吐て罵るべし。又荊州を返し蜀の国
をも取ざらんバ何れの所にか身を居んや。荊州を返さざらんば
呉侯の怒りにふれんとをおそる。此の二ツの事両ながら難し。まことに
にして右哭きあまふといひけれバ玄徳又胸を打て大になきま
なさけなくして哭きけれバ魯粛坐を起て曰く皇叔さのみ哭き給
ふな。其孔明とよろしく事を議せん。孔明が曰く御辺ねがはく
ハ国に回て呉侯に見へ一言の労を辞せず皇叔の痛く哭きたまふ
しで語りの人志るをそへ呉侯定めて怒りをやめんと魯粛が曰く
呉侯志たがひ給ふべからん。孔明が曰く呉侯すでに妹を君
に妻せ給へり。安んぞ志たがひ給はざるの理あらんや。ねがはくハ御辺よ
く此の事を計ひ給へ。魯粛もとより寛仁の長者なれバ玄徳の
痛く哭きのまゝそこくの議論にもおよバず酒宴已で回
りけれバ玄徳孔明拜謝して送りける。魯粛ハ舟に解て直に
柴桑にいたり周瑜にあひて右の趣を告けれバ周瑜大にいかる
ひて曰く御辺又孔明が計に出抜まゐりけり。むかし玄徳が劉表
に身をよせてありしときさへ常に国を奪へんとするの意あり。
いはんや蜀の劉璋をや。なんぞ漢室の宗親あるをおもんぞ。
取ざといふの理あらんや。たゞなにとぞして事を託卒に荊州を
返さじとするのありけり。もし荊州を返さざらんバ御辺らあらず
君の怒にあひ給へん。まさに一ツの計あり。孔明を欺し得べし。御
辺再び荊州に行きて魯粛が曰く。ねがはくハ計をきゝ給へ周瑜

が曰く。御辺又荆州へ行て、已に妹を婚して上へ奏し、
をおのゝ一家の好あり。の〜蜀の劉璋へ漢室の同宗なれば国を
奪ふ志のべ給へ。まづ呉の國の勢を起し、蜀の国を攻取て。
婿引出物を進らせべし。その内ちらあらば。荆州へ返さるべしと
ひの人。魯粛が曰く。そもそも蜀の国へ天下無双の難所にして。
でる。人の國を経くむりへとあるべ。安人ぞ容易に攻取るべ
人志の計無用なるべし。周瑜あざ笑て曰く。御辺の志を驚
実の長者あり。そも安人ぞ。ろうぐ〜く攻取ると得んたぐ蜀を
取て名とし。実へ荆州へ取人為あり。そも蜀を攻るとは大
軍荆州への道を通へ玄徳へ借らんと。生むべてあるべし。そのと
き兵粮武具あんどを請求めたぐちに城下へ寄せその備おき

て攻べ荆州へ取人と。掌の中へあり。ちうるとまへ。ぞが平生の恨
をさとぶぎ。御辺の難をもとへぶらし。魯粛大に喜び手謝し
て。又荆州へ行けるべ。玄徳おやしんで孔明へ問へ。孔明ぶべ
へく。おいまへ魯粛いやぐ呉侯孫権へ見へぐ。たぐ柴へ面りて。
周瑜と計て定おいへ又おらへ来るものあり君たぐ某が諾
くとうえさく。領家〜へ人とく。とへへ出とくむへへまへ魯粛内へ
へて礼をいり某國へ皇叔の哭きへ由を語りへまへ主人孫
權へおへぐ盛德を感じ諸大將と評議をおへく。兵を起し
蜀を取ぐ。皇叔へ引出物せんとへへさり。蜀の國を取へ進
せべ早〜荆州へ返〜へ人。へぐ国の大軍。おの道を通らべ孫へ
へく。とおへの兵粮武具を接應へく。遠路の疲を休ぎら

ひの人。孔明きうを点頭さ曰く古より非親不解其禍と
いへり。おもとさ一家の好とむすぶべきあり玄徳謝して宣ひ
けるは。おもとさ孫曹粛の御恩あり。詞とかけて女人ぞ謝とする
と得ん孔明が曰くり吳の国の軍勢蜀をむかへ。ふるはら
ぞ去の地を通らんときこゝろ遠く生さくもとあまべ曹粛
ん内ひそかを喜びわれく茱萸を回りはまべ玄徳とあいち
孔明を問て曰くいか蜀を取さ。ようまあたんといへ如何ぞ
るの人ぞ。孔明大を笑さ曰く周瑜が死際近付さりまいホ
の計とかけて安人ぞよく。ふ児とこゝもあざむき得ん玄徳の曰
く。その故ときうん孔明が曰くおもま古の假途滅虢の計
策あり周瑜いか蜀を攻るとく名とく。実を荆州を取ん
為あり君もし城を出て吳の軍勢かとふるべ勢ひ
ぬの内て。生取ん玄徳を攻さ。不意を荆州を取
んとて玄徳の曰く。去ることまへ如何せん孔明が曰く御心
と安人ぞ。ようまあたんぞ收拾窩弓以擒猛虎安非
香餌以釣鰲魚周瑜もしきを来らべたとひ死ぬ
とも九分へ魂を失へべとて。趙雲を呼んで。ひそかを計を
さげけ。こゝろを備をふるく相待はまべ玄徳深く喜び
すへ曹粛へ舟を乗せく茱萸を回り。周瑜を見さ。玄徳
孔明大を喜び吳の国の軍勢。荆州を通べきあらをこゝろ
ら出て。とてあきうんとやふと語りはまべ周瑜手を打て大
を笑ひ去の度さぞめて孔明とあざむき得とり。御辺を南

周瑜魯肅を密計と授く

徐盛行て。その由を吳侯に報ず。諸方の城を用心の勢をなさ
て。又程普を大將として。大軍をそなへて助く後陣と
しの人といひはべ魯肅をうまして出さるる。このとき周瑜が矢
瘡大半平愈して。已に白痂を掲げ。膿水も止りて。一身無
事なりしかば。甘寧を先手として。徐盛丁奉を引て
中軍を備へ。凌統呂蒙を後陣として。水陸の勢五万余
騎。二手にわかれて。荆州に進発す。周瑜二万五千の兵を
引て。舟手よりむかひ。内仕落なりと喜び笑ひ給ひ
んで。已に夏口まで来りぬ。この辺を。むかひに出たる人やあると
尋ねさせはべ。忽ち劉皇叔より。糜竺といふ者を使として
報ず。周瑜よびいれて。對面しけるに。糜竺が曰く。主人劉備
は金銀兵粮を用意して。諸軍勢の労を慰せんとの。然て
この不人運びきたりぬ。周瑜が曰く。皇叔いまは何に居給へ
ぞ。糜竺が曰く。荆州の城を。足下の来りぬるを待て。酒
とさかなをもうけんとの。周瑜が曰く。いまは国の大軍を起して。皇
叔の為に。蜀を取て。進らせんが為なり。諸軍遠路を疲る
るあらばとて。持成す。うるはしく。糜竺をもてなす。
れて回りはべ周瑜陸を上て。兵船を江上にそなへ。諸軍次
第に守りて。ここに公安まで来りぬ。その辺を伺はせんとて。艘
の舟もつて。又出てむかふる人もあらばとて。
で。早荆州の城までは十里あまりのあなたに。遥に向て見渡
す。静かにして。ひとりもなき人だに。先手を進んだる斥候の

兵をせ回り荆州の城とこひらけ人を白旗二流おびゝこゝ人あり
こゝ人ぞいとやすと周瑜あやゝ岸の辺ゝ船を止めゝ甘寧徐
盛丁奉ホて志ならべ精兵千余騎ゝ荆州の城下ゝ
到りるゝ出合人もあるりゝ周瑜馬を勒め兵ゝ命じゝ
門をひらけとゝぐらせハまゝ内より問て曰くゝゝ来るゝ
そのゝ呉の兵ゝゝて曰くゝゝ呉の国の大都督周瑜ゝ
その言いまゝ果ざるゝ声の柳子とゝあらゝく城の上ゝ白
旗を推倒ゝ紅の旗を二流さゝあげゝ鎗をそろへ戈をあら
べゝ大将趙雲高矢倉ゝあらゝゝ大音ゝく問て曰くゝ周都
督いかゝあるゝ人ありゝく来りゝ人る周瑜答て曰くゝ皇叔
の為ゝ蜀を取て進せゝと約せりゝのゝ人ゝまゝ来ゝり御

辺あやゝ人で問いゝゝで趙雲ゝ曰くゝ孔明軍師ゝとゝゝ御辺
の假途滅虢の計と推量ゝくゝゝゝゝの城ゝ住ゝ置ゝ人
りゝゝゝ君ゝゝゝ漢室の宗親安ゝゝ義ゝ背ゝ蜀の国ゝ取
ゝ御辺ゝゝ端的ゝ蜀の国を取ゝゝゝ髪をきゝて出中身
を藏ゝ天下ゝ信ゝ失ゝゝ周瑜ゝゝゝきゝて計のあらゝゝ
とゝゝゝゝ急ゝ馬ゝ引回ゝゝゝゝゝ一人令の字の旗とゝ
ゝゝゝのゝゝ来りゝゝ巡教言の勢ゝゝく伺いゝゝゝ関羽ゝ
江陵より攻来り張飛ゝ秭帰より攻来り黄忠ゝ公安より
攻来り魏延ゝ房陵の小路より攻来り四方の軍馬その
多少ゝゝゝゝ喊の声遠近ゝひゝきて四方百余里ゝ震動
ゝ周瑜ゝ取生ゝせよとゝゝゝゝ告けゝゝ周瑜ゝゝこと

きいて馬上よりさかさまに大きに吐血して絶入倒れ落ぬ。諸将まづ救て船中へ回り。
まづ人心地付りて忽ち一人走り来り。文德孔明
前なる山の頂へ酒を飲樂とあるを告ぬ。周瑜い
よ〳〵怒りて。牙を咬歯を切りて。のまれ〳〵軽人ども。蜀の
国を取るのみにあらず。誓て取べしと
て。拳を握てうちむかふ。呉主孫權弟孫瑜を大將と
て。助の勢をさしむけたり。周瑜よびあつめて對面し。右のごとく
語りければ。孫瑜が曰く。我兄の命を受たる来りて御
辺の力を助んとて。おのれを叫まで。ふたゝび引退きた
まへとなり。先手の勢を下知して。已に来りたるよし。
亦候の兵向ふ大勢のよしをうかゝへ。敵の勢あらざるを。
孫瑜よくいまだきけば。荆州の大將関平劉封二人江
上を切塞たりとやいまと。周瑜いよ〳〵怒をなし。牙を咬ぐ
らむるを。孔明使をもつて書簡を送るとやいまと周瑜封
をひらきて。その書を曰く。
漢軍師中郎將諸葛亮致書於大都督公瑾先生麾
下亮自来柔一別至今恋々不忘聞足下欲取西
川亮以為必不可也益州民強地險劉璋暗弱
足以自守今欲本師遠征轉運萬里欲收全
功難呉起不能定其規孫武不能善其後也操雖
有無君之心而有奉主之名或有愚人見孫失利於

孔明が智
周瑜の計を挫く
玄德
孔明
張飛
周瑜

趙雲

赤壁ニ無復貞遠伐之志矣。今操三分天下有其二。欲飲馬於滄海。觀兵於吳會。安肯坐守中原而老王師乎。今孫將軍與兵遠征非長計也。倘操兵一至。江南為虀粉矣。不忍坐視。特此告知。幸垂照鑒。

周瑜見了。恨氣胸塞。長嘆一聲。昏倒於左右。人扶呼。良久甦。書封了。吳主孫權上表。說曹操大將。有為曰。臣忠盡國。報君有日。操方圖篡逆。天命難久。臣力盡君憂。事已至此。天下仰望。長嘆。天亡周瑜。

とぞの世を生じ。あるの人を又孔明と生じ。人を入るとの人。声と上げて大に叫び忽然として命終まり。寿三十六歳。時建安十五年冬十二月初三日なり。諸将ふして哭き。極て已丘をとぶらひて。周瑜が遺書と。早馬打て。吳主孫権に上りぬまへ。孫権その由ときいて。涙をあがして。地にたをれ。魯粛を起し。遺書をひらきさんまへ。周瑜が職を代しやとありその書に曰く。

瑜伏堵泣血頓首百拝。致書於主君明公麾下。切以凡才。昔受討逆殊特之遇。委以腹心。遂荷采任統御兵馬。志執鞭弭。自效戎行。先定巴蜀。次取襄陽。憑賴威靈。事在掌握。至以不逞忽有暴疾

脉自醫療日加無益人生有死修短命矣誠不足惜但恨微志未展不復奉戴命耳方今曹操在北疆塢未靜劉備寄寓有似養虎天下之事尚未知終始此朝士旰食之秋至尊垂慮之日也魯肅忠烈臨事不苟可以代瑜之任人之將死其言也善倘或言有可採瑜死不朽矣臨楮不勝痛切之至

建安十五年冬十二月朝日上書

孫權見了大哭周瑜王佐の才あり惜しいかな不幸にして亡びとりまいらせ如何せん終に臨んで魯肅に託むるこれ從ぎろんやとて即時に魯肅を大都督として国中の兵馬を總領せしめ周瑜が柩を巴丘より送り来りけるに孫權が

うら平途に出て哭してむこへ涙をあふれてうあーと哭く

孔明大哭周瑜

このとき孔明いまだ周瑜が巴丘にくるを夜天文をうらなふに將星墜ちて地に落ちんとせしを笑ひ周瑜が死せりとさとりたるの日玄德に見えそののち結る玄德人に生きくまうるべし周瑜果して死せりとやとて玄德の曰くいかに周瑜死せり却てくいかに計をあきらめ孔明が曰く周瑜が職に代て吳の大都督となるべしいまだ某夜天文をうらなふに將星ちて東方にあり某いまだ周瑜が変を吊ひ号ーく吳の国にかくれ賢人をたづねて我とともにわるべし来り君の助をなすべーし玄德の曰く先生もし吳に行

のぐうの國の大將うまらざと害とるまでべし。孔明ガ曰く周瑜
ぶあらくときまを。某さとさへ況やいまをまをとる柏
まをとく趙雲ととまをまを五百余騎を引て。祭の具ととと
とのへ舟よのりて生りくぶ途よくきけへ吳主孫權ととまを曾
粛を大都督と周瑜ガ柩を送る。柴桑よりて回りぬ
とやうとまをまをよりて直ち柴桑よりりまを。省の兵らを
ぎ魯粛ム報ず。劉皇叔いまを孔明を使ととして周都督の
喪を吊とらんりまを魯粛むへ入まを對面を周瑜ガ手下の
大將おまをときのて。ぶを孔明を殺しく。日比の恨をきくぶん
とおけまをども趙雲ム劍を帶て立なるとをあへてうるぐく
く手を下きを孔明靈前ム祭を祝けぐうら酒をあへて地ム

ひざまづき祭文を読で曰く。

維大漢建安十五年南陽諸葛亮謹以清酌庶羞之
儀致祭於大都督公瑾周府君靈前曰嗚呼公瑾不幸
夭亡修短故天人非不傷我君寔愛酹酒一觴君
其有靈享我烝嘗吊君幼學以交伯符仗義
踈財讓舍以居吊君弱冠濟門會風雲定建霸
業割據江南吊君壯力遠鎮巴丘景升懷憂
討虜無憂吊君手度雄配小喬漢相之賢不
愧當朝吊君氣既王不納質始不垂祖
奮翼吊君鄱陽將幹來說府君納孟事主終
濟吊君才文武籌畧通々小子心寒膽落昭君

凛々公獨諤々火攻破敵撓強為弱想君當年
雄資英粲哭君早逝俯地流血忠義之心英
靈之気命終三紀名垂百世哀君情切愁傷千
結惟我肝膽悲心無斷絶昊天昏蕩三軍愴然主
已哀泣更皆淚漣亮也不才問計求謀助呉拒
曹軍漢安劉將角之援首尾相傳若存若亡
何慮何憂嗚呼公理生死永別朴守其真冥
冥滅滅魂如有靈以鑑我心從此天下再無知
音嗚呼痛哉伏惟尚饗

孔明祭り了て大に哭き地に伏て〳〵く淚泉のごとく哀慟〳〵と已
ざり〳〵べ呉の国の将士もことごとく哀と　催〳〵人々ふ周瑜と孔
明とたがひに睦ごろおとの公の祭の体とて哭きと
親むと骨肉のごとく私語り魯粛も孔明が痛く哭くを見
て人の内に哀をやまし〳〵孔明さらに周瑜と害さるゝかと
り〳〵周瑜が気量窄〳〵く死亡を取たりとてあはれ
べ謹んで敬ひけり孔明まろれて岸の辺に出ぬる舟にのら
んとおりるに一人道服を着て竹の冠をいただきたるその臂
とのべて孔明を引掴声をあげまして曰く汝さぞ周郎を気と
病せて亡ぶ〳〵却て喪を吊と号して来り呉の国の
人とあざむく欺ひて土にて作る人形のごとくを作て争ひ
あざむくべきとて剣を抜て殺さんとす魯粛おそれて後に
りませ来り無礼をなすべとぶべりなまぞと見まべとるいち喪陽

孔明
龐統
孔明
龐統
獻敵を
繪本通俗三國志四編卷之六

の龐統字は士元道号は鳳雛先生なり魯肅と一とおもて孔
明いまだ礼をもつてさつぱり来まつりなるもなど害をなすとおもひ
はまづ龐統剣を棄て打笑ひ戯まるるあやしみなるまま
とのひりるの人魯肅まつられて回りけり龐統ひとり孔明と送りて。
船中に来りともに心中のなるを物語まるる。孔明が曰くまと
量は呉主孫權なるもなど御辺を用ひるべしもしさるあらば
ふつと合ざるをあらべ荆州へ来さとも玄徳と佐る人玄徳
は寛仁の君なり御辺きたらばまるもなど日比の志を遂んと
は書簡を封じてとぐや置べし御辺さるまとをもつて。荆州へ
行べまたとひ居合ざともも。玄徳なるもなど用ひるべしとて。あひ
別まそれより孔明は四郡の巡見に出さり呉主孫權は蕪湖と

いふ所まで出さ周瑜が柩をむかへ祭をなすとて。哭
き周瑜が子ども三人あり。一人は女なり。嫡子周循二男周胤と
やはり周瑜が柩を送さ。故郷にあひく葬りはまづ孫權を南
徐に回り孫將と周瑜が才を称さ。日夜涙を流さ。いまは已
はまるが股肱を失へり。安んぞ又大業を奥さんと。哭きけまへ。
魯肅が曰く某は碌々とし道はたらざる庸才なるを周瑜
がさとやはりて。大都督の任を受とせどもえるべきかと
その職はまるふべきを孫權はくれぐれ一人をもつて君となしけるかの人。
はの人は上天文に通じ下地理を暁り謀略は管仲樂毅
は劣おそ樞機は孫子呉子はまるふべし周瑜はかつてその三策
ちひ孔明も深くその智を服せ幸いまはのあるあり君おん

ぞ。とゝろく用ひのべざる孫權大いに喜んで曰く。彼がつくるその名
ときこゝん魯肅が曰くこの人い襄陽の世家龐統字へ士元。
道号て鳳雛先生とやもてはやすこのまうり孫權が曰くすでに久く
その名をきけりいさ何ぞある。早くこゝに来まる魯肅さきのへ
ち龐統ととゝもあへ来りて内に入り礼をなして孫權その人
をみるに面黒く鼻塾げ眉厚く髯短く形容古怪なり。
男様あしらりけるべんの内喜べどもとるべち御辺の學とおろ
いらある藝うあると問りまべ龐統答て曰くうるはしき物に拘ぞ機
に臨んで変に應ずい孫權又問て曰く御辺の才智周瑜に比
せいいかん龐統が曰く某が學ぶ周瑜と大に相違せり孫權
常に周瑜を愛しく及ぶのあらずとゝもあへりるに龐統いかにまいて

軽んじりまべんの内に怒を含んで御辺さが退け重て用る時
節あるべしとゝいりまべ龐統長嘯して外に出りり魯肅問
て曰く君あんで用ひのべざる孫權が曰くこれ狂人なり用ひて
何の益うあらん魯肅が曰く曹操を赤壁に破りしこの人
連環の計をもちて第一の功を立さり君さくまるとあるべ。
孫權が曰くこの人曹操が手下の兵。
大波に淘うるとて憂ひて本より。舟をはなぎ合せんとする。
意あるにこれりまべ決しくこの人を用まじ魯肅さ歎
きど。孫權用る気色なりまべ。力あく外に出龐統とゝもに
まべ御辺とさくむとの人ども。いぞせん呉侯人を用るをあるを
こゝらく忍で時節を待べ人とゝいりまべ龐統ぞ長嘯して首

と低く言ひて魯粛が曰く御辺荆の国を去んと思ひありや
龐統答へて魯粛又曰く御辺匡済の才を懐く何ぞ功名の
成ざるを憂へやり去る止りをべし恐くは徒に埋もるべし意如何
るあらべ明主を語べ龐統が曰く。主都に行て。曹操の事ありと
も魯粛が曰く曹操の事のみ明珠を暗に投ずが如し速に荆州へ行さ。
劉玄徳の事のみ重く用ゐべし龐統笑て曰く主人本より志の意如
り曹操の事ありとも戯れに詩あり魯粛が曰く書簡どもを御辺
に玄徳に勧むべし御辺の荆州に事のみ常に好て結びまろ
び睦くして曹操を滅さんとの両家の幸なり相構て志の如
忘るべからず龐統が曰く主人すでに平生の願なりとて書簡を
求て直に荆州へ赴けり

122
174
68

繪本通俗三國志 四編 六

122
74
28

初 (四) (五) 三 (六) 編 (六) 目 錄